

中國文學

第十八號

中國文學研究會編輯

第八十一號

二月

生活社發行

中國文學叢書

生活社刊

人間の心理を解かうとして、近代の文學は疲れ果ててしまった。轉換の時代に火を繼ぐものは、素樸な言葉で談ぜられた、人間行為の記録であつて錯雜した心理の虚影ではない。新しく生れるものの爲に、私たちはこの叢書に於いて、いはば根元としての文學について考へたいと思ふのである。

洪秀全の幻想

ハンバーグ著 青木富太郎譯

原一四四頁 定價一四錢

太平天國とその首領洪秀全のことについて、これまでいろいろ書かれてゐるが、その初期の事柄に關しては殆んど書かれたものがない。本書は、著者の夢に身を寄せた、洪秀全の従弟洪仁玕より直接耳にせるところを書き誌したものである。洪秀全の生ひ立ちから、その運動を起すにいたつた経緯等が詳述され、資料として貴重であるばかりでなく、また極めて興味深い讀物でもある。

西太后に侍して

德齡著 太田七郎・田中克己共譯

原一四八頁 定價一四錢

西太后の侍女であつた德齡、若くして西歐の近代的教育を受けた德齡の眼には光緒二十九年、三十一年(明治三十六・三十七)年の紫禁城の有様はどう眺めたであらうか。そこに崩壊せんとする大清帝國の苦悶と、それをも知りぬけた西太后を饒る宮廷の榮華。若い、聰明な侍女は、女らしい細かな筆致でそれを再忠に描き出した。世に識られた西太后のための温かい同情と思慕の追憶記。

老殘遊記

劉鐵雲 岡崎俊夫譯

原一四八頁 定價一四錢

限りなき社會批判と清の政治。人間は打たぬめされ、嘲笑、狂笑する精神の躍る反響だけが響く。この小説の作者は弱かに中世文字の餘韻を、用ひられながら黄河水樹離散の設計書を胸に抱いて新舊の激戦地に追死した。作史は苦なし、能更こそ白雲ありと作者に提唱されたものは何であるか。

日本出版文化協會推薦圖書

● 原價一十五錢

大陸の美術

一 熱河行

三 浦 常 夫
小高根太郎

十月四日の夜おそく、奉天を發つて承德に向ふ。同行は奉天博物館の上原之節君と、版畫家の松村氏とである。折柄、寢臺車なく、しかも列車は非常に混みあつてゐるので、とても眠るわけに行かない。溫度は相當にひくいし、列車は腹立たしい位に遅い。錦州で夜が明ける。ホームに下り、支那人の間にまじつて、あたたかい豆腐のやうな物をたべる。鶏の丸焼もかじる。同行の連中は、氣味わるがつて手にもしない。

この邊りから、いよいよ荒涼たる山地にかゝる。山また山、それが、すべて樹木一本もはえてゐない禿山ばかり、えんえんと、えんえんと、十餘時間も同じやうな景色ばかり見る。壯大ではあるが、しかし何といふ退屈さであらう。

のどのかわく景色だとは、けだし松村氏の批評である。處に山羊や羊を放牧してゐる處がある。黒豚が一生懸命走つてゐる。なかなか愛らしいが、豚といふよりも、むしろ先祖の猪に似てゐる。

食堂車の飯は大へんまづいけれど、うさ晴らしにはなる。しかし、それもすんでしまふと、今度は、どうしようもなく退屈である。時々ぬねむりを發し、目ざめると時計をのぞきこみ、あと何時間かゝるかと思へば、氣にやむ。次第にくらくなる。とつぷりと暮れたころ漸く承德につく。降りてみると、まつくらで鼻の先さへ見えない。ちやうど中秋の名月にあたるのだが、あひにくの曇りである。雨に

中國文學第八十一號目次

昭和十七年
二月

大陸の美術……………	三浦常夫……………
「上海繁昌記」其他……………	増田 涉……………
老殘遊記の面白さ……………	田中克己……………
馬相伯先生年譜……………	實藤惠秀……………
創作・玉瑣傳……………	武田泰淳……………
周作人について……………	吉田敏幸……………
文化消息……………	……………
書評……………	……………

といふことは多少の感なきを得ない。試みに手元の「海上墨林」を検するに袁祖志の名は見えない、繪も字も別に書かず、遊び歩いて小唱を書いてゐたもののやうだ。開港地としての上海が國際的な治遊の繁華をほこることは、今も昔も變りはあるまい、「滬游雜記」にもこれにふれてゐるところが少くないが、中華書局の「上海研究資料」の中には「滬娼研究書目提要」があつてこの方面の著書を詳しくあげてゐる、私の藏するものの中にも玉鮓生、即ち王韜の「海陬冶遊錄」（光緒四年刊）や指迷生の「海上治遊備覽」（光緒九年刊）がある。

「滬游雜記」の卷首にある租界の地圖や各國の國旗及び商船旗は「上海繁昌記」では刪られてゐるが、その代り黃浦江及び蘇州河の景を描いた安田老山の口繪が入つてゐる。安田老山については私はこれまで詳しいことをきいたことはなかつたが、最近上海の「新中國報」に老山のことがよく詳しく出てゐるのを見た。

それによれば、安田老山が上海に渡つたのは、確實な時は分らないが、元治元年であることは略々信すべきだといつてゐる。その如何なる根據に基くかは明記されてゐないが、元治元年といへば、徳川幕府が第二次上海視察船を

發した年で、記録によれば幕吏併せて十人（多くは箱館奉行の屬吏）、其他箱館の町年寄及び商人各一名、水夫凡そ四十名ほどを加へて、總勢五十有餘人とされてゐる。この一行の中に果して彼がゐたかどうかは分らない、或は單獨で渡滬したのかも知れない。

それはとにかく、「新中國報」の記するところによれば、老山は美濃の人で、天保元年に生れ、名は養といつたが、生地が養老瀧の附近にあつたから、老山と號したのだといふ。長崎春徳寺の畫像、日高祖内に師事して繪を學んだが、元治元年（？）上海に遊ぶや、胡公壽等と交つた、そして老山はその益を得るところが多かつたといふ。當時老山の畫に對して上海ではかう批評した、といつて「淞南夢影錄」といふ本から次の如く引用してゐる。

「日本安田老山、徐福の仙郷に居り、鄭虔の絶技を擅にす。滬に寓すること日久しく、筆墨遂に多し、作るところの墨梅及び小幅の山水、淡遠疏秀、略々吳小仙の筆意に似る、字と小詩また頗る致あり、誠に彼の邦の翹楚なり」

元治元年から明治元年まで三年間、上海にゐたが、歸國して長崎に残した愛人、伊原愛を伴つて再び渡滬した、この愛妻はしかし明治五年七月上海で死んだ。その碑文は胡

公壽が「日本紅楓女史之墓」と題して、いまもなほ閩北日本人墓地に残つてゐるといふ。

老山は上海にゐて繪を研究するほか、傍ら清廷の事情を調査してゐたといふ。明治七年に臺灣に従軍し、専ら地圖を描いてゐたが、久しからずして東京に歸り、明治十五年に歿した。

以上のやうなことが「新中國報」（十月二日）に記載されてゐる。黒龍會編の「東亞先覺志士記傳」にも老山の傳が見えるが、それによれば「歸朝後その名聲が高かつたが、明治十六年八月病んで東京に歿した、享年四十八」とある。

「中國文學 三月 第八十二號」

「南方と中國文學」 特 輯

「中國文學 四月 第八十三號」

「日本における支那語の發達」

特 輯

老殘遊記の面白さ

田 中 克 己

老殘遊記はお世辭でなくて面白かつた。雜誌に載つてゐる時にも毎月待兼ねて讀んだが、その中、休載されたので本になるのを期待すること久しかつた。

それでこの小説の面白さを、讀み終へてから色々考へて見たが、僕の場合には二つの理由が考へられると思ふ。

第一の理由は先づすべての讀者に共通なものであらうと思はれるが、講談の「水戸黃門漫遊記」のもつ面白さと似通つた面白さである。悪代官が幕府の威光を笠に着て、罪のない良民を虐げる様を細々と無智な第三者や當事者に語らせ讀者をして悲憤の念に耐へざらしめる。たゞし水戸黃門の場合は讀者の方で光圀の身分を知つてゐる。知らないのは語り手だけである。その點で老殘と少し異なる。前提が既に與へられてゐる丈に興味が減殺されるわけである。その代り代官をやつつける場合の痛烈さは、老殘の方では薄

くなつてゐる。しかし老殘の方では悪役人のやり方も一應複雑であつて、しかも役人の方ではたゞ清廉なる官吏たらんとして却つて人民を虐げることになる、といふ深く考へさせられる問題を含んでゐる上、事件の性質もこみ入つてゐる。これは支那社會の複雑性にもよるのであらうが、老殘遊記の文學的價值を増してゐるのではないかと思ふ。何れにしても僕はこの小説を読みながら、少年の頃、讀んだ講談本の感觸を度々なつかしく思ひ出したことであつた。これが一つ。

第二の理由といふのは、やはり僕の専攻の史學に關係した史料的な面白さであると思ふ。御承知のやうに、支那は古來文學の國といはれる丈あつて、書かれたものを一概に信じてかゝると歴史家はひどい目にあふ。言葉が墮落してゐるばかりでなく、文章といふものが墮落してゐるのである。美辭麗句の濫用に止まらず、善事徳行が捏造されてゐるのである。社會の内幕、政治の内幕、制度の得弊などは、政府の文書や四角張つた文章では一切窺知出來ぬ様に煙幕を施されてゐる。

それがこの種類の小説では大變明瞭になるので、一冊を讀んだだけで、數十冊の價值がある。ところが殘念なこと

らは現在の中國の裁判から類推的に考へる以外には、老殘遊記のやうな書に據らねば絶対に知り得べからざる事柄なのである。

地方官の政治の實際にしても、幕友の活動といふものが、それが私的な存在であるだけに、公けの文書には絶対に對出て來ないし、しかも直接民政の衝に當るのが、知府、知縣、知州などではなくして、彼等であるといふ動かすべからざる事實がありながら、これらの書に當る以外にはそのことを知り得る手段は無いのである。こんな種類の事柄を擧げてゆくと際限がないが、支那研究などに志す人にとつてこの翻譯が如何なる意味をもつかは、これだけでも知れると思ふ。

「現形記」を引合ひに出したから、序でに一言すると、「老殘遊記」はあれよりずっと文學として勝つてゐる。前者が單なる曝露に終つてゐるのに對し、これには救ひがある。それは水戸黃門式の救ひであるかも知れないが、社會惡の剔抉、しかもそれが相當に文學的鼓張を伴つた剔抉のみに終始してゐる「現形記」のマゾヒズム的な面に對し、こゝには清潔な、理想家としての老殘の活動、明るい、さうして社會惡を何らかの形で改めてゆかうとする彼の眞摯な努力が讀者に一種の安堵を與へ、彼への共感が眞摯な讀

に、この種のものの翻譯が殆ど出なかつた。但しそれはこの種の政治小説に限らず、中國文學全體に關して云へることであつて、大家先生は徒らに慎重に構へて、その奥深い學問の程は、決して翻譯などと云ふ俗的な仕事では示されなかつたのである。さうしてたま／＼素人乃至、勇敢なる新進などの譯が出る、忽ち到處で誤譯の指摘が出る、ひどいものになると批評の限りにあらずなど一言にして片附けておくまでになる。可哀想なのは譯者ばかりでなく、眞劔に支那の文學、支那のことを知りたがつてゐる支那語、支那文に堪能ならざる利用者までがその巻きぞへを食つたわけであつた。かくして今古奇觀の全譯も出ねば、儒林外史も二十年目睹之怪現狀も譯を持たないまゝに、支那事變となり、さうして色々な悪書の出版全盛時代となつても、未だにこれらの本は出るといふ噂も聞かない。

「官場現形記」がこの本に先立つて出た時、さうした渴の一部がいやされた感じを受けたのは僕のみではなかつたらうと思ふ。しかしこれも第一巻が出たまゝであとは何時のことやら廣告も出ない。現形記もさうだが、例へてみれば、支那の裁判の實際、如何なる形式でそれが行はれるか、法廷の構造、宣告の申渡しの様子、刑罰の施行狀態、これ

者には、何らかの方針を示すやうな氣持を與へると思ふ。九回、十回の桃花山中の曉姑や黃龍子の談話は少し退縮かも知れないが、少くとも瓊姑出現の場面はこの小説に鮮かな色彩を點じてゐる。作者劉鐵雲は從來、殷墟の龜甲獸骨文字の蒐集家としてのみ知つて來たが、この小説のお蔭で、一層深味のある實に尊敬すべき情味のゆたかな人物であることを知り得た。記しながら岡崎さんには色々お禮を云ふべき點の多いことを思ふ。

追記 書き終つてから氣になり出したので一寸書き添へておく。はじめに「水戸黃門漫遊記」などを擔ぎ出したが、「老殘遊記」があんなに卑俗な杜撰な物だといふ意味では毛頭なく、たゞあれほど面白いといひたかつただけである。但し「水戸黃門」をも頭からは輕蔑して貰ひたくない氣が今の自分にはある。昨日も堀辰雄氏の所で一席辯じて來たことだが、講談本の「水戸黃門」や「太閤記」を全然讀まないで、西洋の童話や初歩的な科學知識の本から、自分以外の人生を教へはじめられる今の少年は大變可哀想だと思ふ。同様な意味で中國のことを何にも知らない大人に對して、スミスの「支那人氣質」や

パアル・バックや林語堂物のみが與へられてゐて、「三國志演義」や「水滸傳」が完全な形で與へられてゐないといふのは、悪いと云つていひ過ぎなら、少くとも片手落ちであると思ふ。

それから今一つ誤譯の指摘云々は中國文學誌上の翻譯時評のことを云ふのでは更々無い。あれは當然のことが正當な形式で云はれてゐるのである。批評にも値ひしなない惡譯があるとすれば（實際あるには違ひないが）、これは良譯が無いと云ふことと聯關がある。事實上、いくら何でも良譯と稱すべきものがあれば、それ以下の惡譯は、コムマーシャルイズムから云つても成立たないのである。時間的にこれと反對の場合には、公開でなくともいいから、どしどし誤譯を指摘し、嚴正なる批評を行つて、改譯を餘儀なくせしめるとか、絶版にさせるとかの方法がとらるべきである。但しこの場合、責任者として批評をした先生がその任に當るべきが當然であらう。それにしても世の惡譯家先生の方でも、もう少し専門家の門を叩くなり、参考書を見るなりして、自分の仕事を愛する氣持があれば、とは僕も思ふ。批評の側には譯者への愛情が足らず、譯者には仕事への愛情が足りない。これも

馬相伯先生年譜

實 藤 惠 秀

ここに紹介、批評せんとする本は、中國史學叢書の一、張若谷編著、「馬相伯先生年譜」、民國二十八年十二月初版、商務印書館發行、本文二九六頁、實價一元五角。

この内容批評に入るまでに、わたくしが、なぜこの本を買つたか、について語らしめよ。

わたくしは、今年（昭和十六年）正月、母をうしなひ、その葬式をすませたの歸途、大谷本廟へ納骨のため京都に下車した。東京行の都合よい汽車まで時間があるので、御所にちかい巢文堂に立ちよつた。店頭でちよつとみたのがこの本である。

馬相伯といへば、わたくしも十年ばかり前から知つてはゐる、あの「馬氏文通」を書いた馬建忠の兄さんであること、たいへんながひきをしてゐる文化人であること。

滿洲事變前に「日本研究」といふ雑誌が上海から出てゐたが、

昨日までの世相の一環だつたのであらうか。

（十二月二十二日記）

曹 禺「北京人」

文化生活出版社の文學叢刊で、また一冊、曹禺の戯曲が出た。「雷雨」「日出」「原野」などと同様、長篇の戯曲である。曹禺の曾一家の家庭生活を取りあつかつた悲劇で、構成の上では「雷雨」に近い。曾一家は悪い意味の「北京人」であつて、とても救ひがたい状態にある。彼等は青白き士大夫文化人か、慈ふかき太である。ところがここに全く別種類の「北京人」がある。ここがいかにも曹禺らしいところで、その「北京人」は人類學上で云ふ「北京人類」のことである。袁と云ふ人類學者の學術探險隊につかはれてゐる啞の巨人が、この劇の標題をなす「北京人」なのである。巨人ゴレームをもぢつたものとも考へられるが、この無言の巨人が、北京の新しい希望を象徵してゐるらしい。弱々しい、今にも滅亡しきうな曾一家と對照的に、いかにも力強くこの「北京人」が出現して来る。人類學者袁が、はじめ「北京人」を曾一家に紹介する時云ふせりふの中に、作者の考へが表現されてゐるらしい。「四十萬年前の北京人とはかくの如きものでありました。殺したければ殺し、殴りたければ殴りました。鮮血をすすり、生肉をくちひました。現在の北京人のごとく文明ではありませんでした。」つまり曹禺は現在の北京文化の衰滅を豫言したとも言へよう。曹禺と云ふ作家は、元來が道具立専門で、實に道具を飾りたてゐるのがうまい。この劇でも、いろいろ道具立てで北京情緒をあらはれてゐる。しかし劇の内容は相かはらず、いり組んだ男女の關係で、くだい物である。人物の組み合わせに夢中になつて、自己の精神などそつちのけにしたところがある。ただ「北京人」と云ふ題が面白いし、現在の「北京人」と、古代の「北京人類」を結びつけたところ、一寸上手にひねくり出したなと感じたので、紹介して置く。去年の暮に出版されたばかりだから、まだ讀んだ人は少いであらうが、二元八角も出して讀む必要はあるまい。（武田）

その表紙の字は「九十〇相伯」として書かれてゐるところから知つてゐた。

事變になつて、まだ生きてゐるかわないかは知らずにゐたが、巢文堂の店さきでみてみると、百歳まで生きて、一昨年の末に死んだことがわかつた。

でも、そのときは、べつに買ふ氣もなく、たゞのんきな田舎の人でなくて、よくも百歳まで生きたものだ、と感心したばかりであつた。

二

ところで、この夏、慶大の奥野信太郎先生から、御珍藏の「瑣々錄」といふものを拜借して讀んだ。これはソカウマンといふ留學生が明治三十八年から九年にかけて、およそ半とし日本に留學したあひだの、日々の日記を書きこんだものである。刊行せられた東遊日記類とちがひ、非常にこまかい、おもしろいことが書かれてゐて、日交關係研究上、めづらしい資料であつた。

その丙午（光緒三十二年）正月初四日すなはち明治三十九年一月二十八日のところを見ると、本郷區春木町本郷座において、日華學生演說會が開かれたことがしるしてゐる。

この前年の十二月、いはみる「留學生取締規則」騒動があつて、一萬にちかき留日學生が大舉歸國した事件があり、この年の一月十三日やうやく復校するやうになつた。してみると、日交間に暗

後記

ちかごろ思ふこと、三十年の生涯の空しさである。いつたい何をしてきたか。何もして来なかつたのである。今になつてやつと世の中の動きが少し分りかけた。それも説明されたから分つたので、自分で開拓したのぢやない。情ないが本當である。それでも、爲政者の口眞似と時流への迎合を商賣にしてゐる漢學先生よりは僕の方がマシかと思つてもみるが、ドダイそんな比較がすでに卑屈である。これからはずと脚を張り、自信にみちた行動をしたい。戦争を行ふ決意に負けないやうに、潔い行動をしたいと、そればかり考へてゐる。

それで、この機会にもう一度改めて支那を見てみたいと思つてゐる。實現すれば、この雑誌の出来るころには海を渡つてゐよう。何もかも初めからやり直しである。最初から出直す。今こ

そ僕らの働くときである。この雑誌も、今まではなかつたものとして、もう一度創刊號から出發するつもりである。今までのことを考へると恥しいが、もう恥しいなんていふことも考へまいと思ふ。力を盡してみたい。いへんでも世の中を動かしてみたい。實際、今までは動かさればかりゐたのだから。豫定では北京、蒙疆、南京、上海を廻つて三月末に歸る。何か自分に擱んできたい。今度ばかりは、いくら僕でも少しは眞剣なつもりである。

一年間編輯の實務を擔當してくれた齊藤君が近く晴れの入替をする。大東亞戦争下に名譽の門出を送ることは、中國文學にとつても嬉しいことである。後任がないので、當分僕が實務の方も見ることにならう。そのつもりで、支那から歸つてきたら中國文學の方になるべく時間を割きたいと思つてゐる。

書店の方でも僕らの要求を容

れてくれて、四月からは編輯費や印刷部数も若干の増加を見るはずである。それと同時に、事務の方も整備して、今までのやうな會員諸君の不満を買ふことのないやうにしたいと思ふ。立派な中國文學を作るつもりだからどうか益々御援助賜りたい。この號はいつともより少し頁が薄い。三月と四月に特輯號を出す豫定で、今月の分を減した。三浦常夫氏は美術研究所勤務、コギトの詩人である。増田、實藤、田中、武田の四氏は紹介済み。吉田敏幸氏は昨冬東大卒業、これまた今は雄々しい兵士として出で立つ人である。

中國文學叢書は、二冊目の「洪秀全の幻想」が発賣になつた。「西太后に侍して」も間もなく出る。「老殘遊記」は賣切中のところ再版が刷上つた。以下續いて刊行の豫定である。本年は十冊くらゐ出版したいと思ふ。幸に御愛顧賜りたし。(竹内)

中國文學第八十一號

昭和十七年一月廿五日印刷納本
昭和十七年二月一日發行

編輯人 竹内好

編輯所 中國文學研究會
電話 澁谷(46) 二二三番
振替東京八三一五〇番

東京市神田區神保町一四四番
株式會社 開明堂

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

東京市神田區須田町二一七番
發行所 鐵村大二

中國文學叢書

生活社刊

東京市神田區須田町二一七番
電話 澁谷(46) 二二三番
振替東京八三一五〇番

人間の心理を解かうとして、近代の文學は疲れてしまつた。轉換の時代に火を繼ぐものは、素樸な言葉で談ぜられた、人間行爲の記録であつて錯雜した心理の虚影ではない。新しく生れるものの爲に、私たちはこの叢書に於いて、いはば根元としての文學について考へたいと思ふのである。

洪秀全の幻想

ハンバーグ著 青木富太郎譯

價一圓四錢 錢一四錢

西太后に侍して

德齡著 太田七郎・田中克己共譯

價二圓八錢 錢一四錢

老殘遊記

劉鐵雲 岡崎俊夫譯

價二圓八錢 錢一四錢

太平天國とその首領洪秀全のことについて、これまでいろいろ書かれてゐるが、その初期の事情に関しては殆んど書かれたものがない。本書は、著者の許に身を寄せて、洪秀全の従弟洪仁玕より直接耳にせるところを書き誌したもの。洪秀全の生ひ立ちから、その運動を起すにいたつた経緯等が詳述され、資料として貴重であるばかりでなく、また極めて興味深い讀物でもある。

西太后の侍女であつた德齡、若くして西歐の近代的な教育を受けた德齡の眼には光緒二十九年、三十(明治三十六・七)年の紫禁城の有様はどう映つたであらうか。まさに崩壊せんとする大清帝國の苦悶と、それを知らぬ西太后を驚かす宮廷の榮華。若い、聰明な侍女は、女らしい細かな筆致でそれを丹念に描き出した。世に誤られた西太后のための温かい同情と思慕の追憶記。

限りなし社會惡と清毒の泥沼。人間は打ちのめされ、嗤笑、狂笑する精神の腐爛な反響だけが響く。この小説の作者は、奔れた半骨文字の研究と、用ひられなかつた黄河水利施設の設計書を胸に抱いて新羅の流離地に憤死した。俗吏は賢なし、能吏こそ自害ありと作者に絶叫せしめたものは何であるか。

日本出版文化協會推薦圖書